

学習者は事前学習課題としての文型動画視聴をどう受け止めたのか

— 初級日本語オンライン教材の開発に向けて —

工藤嘉名子・伊東克洋・西島絵里子

キーワード：初級日本語オンライン教材、オンデマンド教材、文型学習動画、事前学習、
オンライン版「ともだち」

1. はじめに

近年、日本語教育の分野においても、教育のデジタル化やオンライン化が急速に進み、学習・教育の選択肢も広がっている。特にここ数年は、Covid-19の感染拡大という特異な社会状況の中、これまでにないスピードで、教科書の電子書籍化やオンライン学習のためのサイトやアプリ、日本語コースの開発・普及が進んでいる。国際交流基金が運営している日本語学習ポータルサイト「NIHONGO e な」(<https://nihongo-e-na.com/eng/>)には、2022年10月末現在で、日本語学習サイトとして、初級レベルのサイトが153件、中級レベルが124件、上級レベルが116件掲載されており、自学自習可能な日本語学習リソースやコースが数多く存在していることがわかる。

一方で、既存のプログラムや日本語の授業においては、コロナ禍等の事情で来日できない留学生や教科書の入手が困難な学習者に対して、対面の授業や紙媒体の書籍に代わる学習機会や学習リソースを提供することが急務であった。こうした問題に対処するため、東京外国語大学（以下「本学」）においても、同期型の日本語オンライン授業¹の提供をはじめ、教科書の電子書籍化²やオンデマンド型の日本語教材開発が急ピッチで進められている。

本稿では、まず、現在開発が進められている初級日本語オンライン教材の概要について説明する。次に、オンライン教材の試行と検証の一環として、コンテンツの1つである「文型学習動画」を初級日本語クラスの事前学習課題として視聴した際の学習者の使用感について、①日本語学習における動画視聴の有用性、②動画視聴課題の負担感、③動画のスライドデザイン、という3つの観点から分析する。その上で、教材の改善点および教材の効果的な活用方法について考察してみたい。

¹ 山田・伊藤編（2021）の「Web会議型授業」（p.8）、保坂（2022）の「同時双方向型」（p.128）に相当するオンライン授業の一形態である。

² 本学の留学生日本語教育センターで開発した中級教科書『出会い』（ひつじ書房より刊行）については、本冊・別冊ともに、2020年にKindle版も刊行され、海外からの購入も可能になっている。

2. 初級オンライン教材の概要

2.1 教材開発の位置づけおよび目的

オンライン日本語教材開発プロジェクト³は、本学の「アクションプラン 2021-2022」⁴の「学部・大学院の教育の充実と豊かな学生生活の実現のために」の1項目である「オンライン『大学の日本語』プログラムの開発と活用」に相当する事業である。現在開発中の初級日本語オンライン教材は、本学の留学生日本語教育センターで開発した初級日本語教科書『大学の日本語 初級 ともだち』（以下「書籍版『ともだち』」）をデジタルコンテンツ化したオンデマンド教材（以下「オンライン版「ともだち」」）である。

オンライン版「ともだち」は、Moodleでパッケージ化し、将来的には、本学の全学日本語プログラム⁵などでのブレンディッドラーニング（オンデマンド併用型）の教材としての活用をはじめ、本学の海外協定校など国内外の大学に所属する日本語学習者を対象とした、セルフラーニング（フルオンデマンド型）の日本語コースを提供することを目指している（図1）⁶。なお、書籍版の二次利用にあたっては、著作者や出版会など関係者の許諾を得ている。

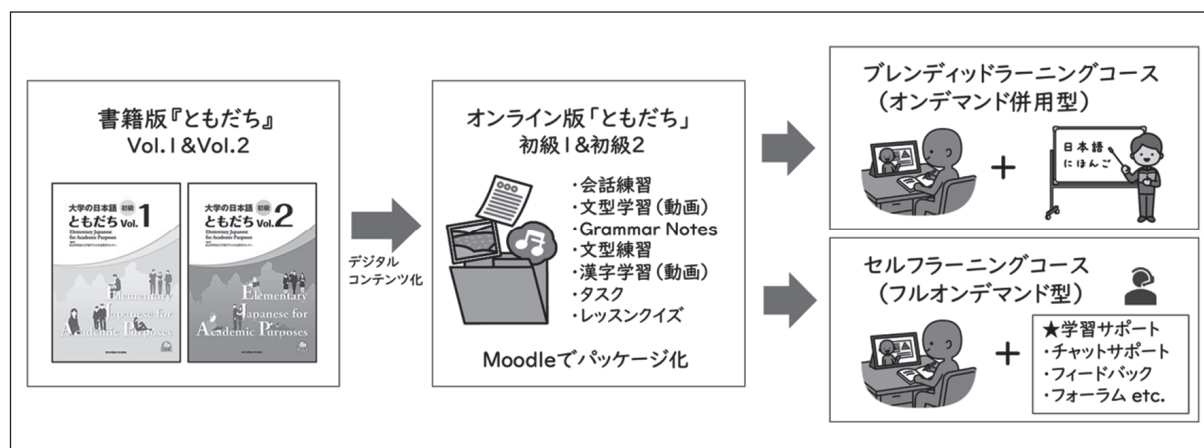


図1 初級オンライン教材「ともだち」の開発の概要

2.2 オンライン版「ともだち」のコンテンツ

図1にあるように、書籍版『ともだち』はVol.1とVol.2の2分冊で、それぞれ12課から成る。オンライン版「ともだち」は「初級1」「初級2」に分かれているが、課構成は書籍版と同じ12課構成である。同様に、オンライン版のコンテンツも書籍版の内容に対応しており、①会話練習、②文型学習、③ Grammar Notes、④文型練習、⑤漢字学習、⑥タスク、⑦レッスクイズから成る

³ プロジェクトメンバーは、筆者（工藤・伊東）を含む4名の日本語教員とITの専門教員1名である。

⁴ 東京外国語大学「アクションプラン 2021-2022」参照のこと。

(<http://www.tufs.ac.jp/abouttufs/president/actionplan/>)

⁵ 本学の学部正規生をはじめ、海外協定校からの交換留学生などが学ぶ日本語プログラムである。

(http://www.tufs.ac.jp/student/international_student/Japanese_Program.html)

⁶ 学術認証フェデレーション（通称「学認」）に加盟している国内の大学に在籍する学習者に向けては、Moodle for Open Educationを用い、それ以外の学習者に向けては、本学のOpen Academy Moodleを通して、コースを提供していくことを検討している。また、セルフラーニングコースの形態も、一方向・非同期型の「オンデマンド配信型」または双方向・非同期型「オンデマンド課題提出型」（保坂 2022, p.128）のいずれにも対応できることを想定している。

(表1)⁷。このうち、②文型学習と⑤漢字学習は動画である。①会話練習、③ Grammar Notes、④文型練習は、Moodle に実装されているオープンソースのプラグインソフトウェア H5P (HTML5 パッケージ) を使い、インタラクティブビデオやフラッシュカードなど、オンライン学習に適した形式に変換してある。⑥タスクと⑦レクシクイズは、それぞれ Moodle の「課題」「小テスト」の機能を使って作成してある。本稿では、オンライン版「初級1 (第1課～第12課)」のコンテンツのうち、②文型学習 (動画) の試行について報告する。

表1 オンライン版「ともだち」初級1・初級2のコンテンツ

オンライン版	書籍版との対応
①会話練習：会話の視聴、会話表現・日本文化解説 (英語)、ロールプレイ (音声付)	「会話」とその英訳
②文型学習：動画による文型解説 (日本語・英語)	「文法 Grammar」
③ Grammar Notes：英語による文法解説	「文法 Grammar」
④文型練習：H5P の多様な形式によるパターン練習	「練習」
⑤漢字学習：動画による漢字解説・筆順アニメーション	「漢字」
⑥タスク：モデルの練習と録音機能を用いた課題提出	「タスク」
⑦レクシクイズ：各課の学習項目の確認クイズ	「もんだい」

3. 文型学習動画の構成とデザイン

3.1 文型学習動画の構成

オンライン版「初級1」の文型学習動画には、文型編 (31本)、動詞や形容詞の活用形編 (11本)、数字や曜日、助数詞などの語彙編 (7本) の3種類 (計49本) がある。文型編では、各課の学習文型⁸を2～3項目ずつの「Part」に分割して動画化してある。

動画の長さは各課で扱う学習項目や項目数によってばらつきがあるが、文型編は平均約19分、活用形編は平均約17分、語彙編は約12分である。また、各課の動画本数および合計時間、1本あたりの平均時間は、表2の通りである。1課あたりの動画数は、活用形編、語彙編の有無によって2～6本と幅があるが、平均4.1本である。1課あたりの動画の合計時間の平均は約1時間13分31秒、動画1本あたりの平均時間は18分43秒である。動画制作にあたっては、学習者の集中力や疲労を考慮し、1本あたり20分以内、1課あたり1時間程度を目安とした。ただし、第6課以降の後半の課では、1本あたりの平均時間が20分以上と長くなっている。課が進むにつれて、文型と一緒に使う活用形や助詞、類似した既習文型との使い分けなど、解説のポイントが増えるためである。

⁷ 書籍版の各課にある「タスク Can-do」と「ぶんけい」(学習文型項目リスト)は、オンライン版では、Moodle の各課の説明 (トピック) に掲載されている。

⁸ 書籍版各課の学習文型は5～9項目と課によって異なるが、Vol.1では平均6.3項目配当となっている。

表2 オンライン版「初級1」各課の文型動画の概要

課	動画数	内訳	合計時間 (時：分：秒)	平均時間／本 (分：秒)
1	3	文型 (3)	0：42：46	14:15
2	5	文型 (3)・活用 (1)・語彙 (1)	1：06：39	13:20
3	5	文型 (2)・活用 (1)・語彙 (2)	1：11：00	14:12
4	5	文型 (3)・活用 (1)・語彙 (1)	1：17：26	15:29
5	6	文型 (3)・活用 (1)・語彙 (2)	1：35：02	15:50
6	3	文型 (2)・語彙 (1)	1：02：33	20:51
7	3	文型 (3)	0：56：43	18:54
8	3	文型 (2)・活用 (1)	1：04：02	21:21
9	6	文型 (2)・活用 (4) ⁹	1：43：13	17:12
10	3	文型 (3)	1：04：27	21:29
11	5	文型 (3)・活用 (2)	2：05：06	25:01
12	2	文型 (2)	0：53：20	26:40
平均	4.1	—	1：13：31	18:43

文型学習の中心となる文型編動画の基本構成は、文型ごとに、①文型項目と例文の提示→②教師による解説（日本語・英語併用）→③理解確認練習→④英語解説（総括）→⑤例文のリピート練習があり、最後に、⑥まとめのクイズ→⑦学習項目を使用したスキットという流れになっている。②教師による解説では、書籍版『ともだち』の「文法 Grammar」での英文解説の内容を基本としながら、必要に応じて独自の例文やイラスト、用法に関する補足説明を日本語と英語で加え、授業での文型導入に近い解説を試みている。また、④英語解説（総括）は、基本的に書籍版の「文法 Grammar」の英文解説を口語調にしたものである。文型の解説を主とした動画ではあるが、インタラクティブに学べるよう、練習問題やリピート練習などのアウトプット活動（③⑤⑥）を組み込んである。

3.2 文型学習動画のスライドデザイン

文型学習動画は、いずれもプレゼンテーションソフトウェア（PowerPoint）を用いたスライドショーをMP4に変換したものである。動画用のスライドの作成においては、長時間視聴しても目が疲れないう、使用フォントと配色に留意している。

まず、フォントについては、「読みやすく、読み間違えにくい」とされるUDデジタル教科書体¹⁰を使用している（図2）。UDデジタル教科書体は、ロービジョン（弱視）やディスレクシアの人

⁹ 第9課の活用形編動画が他の課より多いのは、この課で導入される「て形」「ない形」の活用について、後の課での練習に役立つよう、「ます形」からの活用と「辞書形」からの活用の2通りずつ作成してあるためである。

¹⁰ UD（ユニバーサルデザイン）書体の1つである。（<https://www.morisawa.co.jp/fonts/udfont/>）

にとっても見やすく読みやすいことが科学的にも証明されており¹¹、自治体や教育現場での導入をはじめ、英語教材や漢字辞書などでも使用されている。本教材開発プロジェクトでは、仮名や漢字といった文字学習にも適した自学自習用の教材を開発したいと考え、この教科書体フォントを採用した。なお、UD デジタル教科書体を用いた教材開発およびウェブでの配信については、フォントの開発元である株式会社モリサワの了承を得ている。

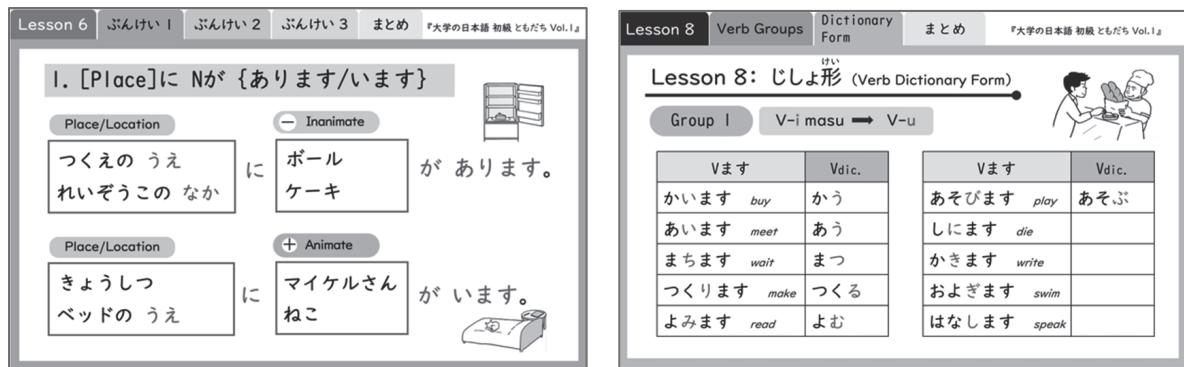


図2 文型学習動画スライドの例（左は文型編、右は活用形編より）

次に、レイアウトや配色については、高橋・片山（2014、2018）の「伝わるデザイン」等を参考にしている。スライドで使用する色は、同系色やグレーを使うことで色数を減らし、4色以内を基本としている。また、色覚の多様性にも配慮し、文字の基本色は黒とし、強調色は赤や緑を避けて彩度を押さえた青（寒色系）と濃いピンク（暖色系）の2色を基本とするなど、文字の読みやすさと情報の伝わりやすさを重視した。例えば、図2の左図では、学習項目である「うえ」「なか」「あります」「います」は青字、助詞の「に」「が」はピンク字で強調されている。同様に、図2の右図では、活用のルールを説明する「V-i masu → V-u」の「i」「u」はピンク字、表内の「ます」「う・つ・る・む」など活用の部分は青字となっている。さらに、スライドでは、学習者が文字と音声に集中でき、かつ目が疲れないう、イラストもグレースケールのもを用い、アニメーションもディゾルブインを基本としている。

4. 文型学習動画教材の試行

4.1 本試行の目的

オンライン日本語教材開発プロジェクトでは、①オンデマンド型教材開発と②オンデマンド型コース開発の2つを主な柱として開発を進めている。今回の試行は、①オンデマンド型コンテンツ開発の一環として、コンテンツの中で最も大きな比重を占める文型学習動画に対する視聴者（学習者）からのフィードバックを得ることを目的としており、視聴に耐えうる動画であるか、日本語をゼロから始める学習者にとって理解可能な内容であるかどうかを検証することが主たる目的であった。したがって、今回の試行では、動画視聴が日本語の知識や運用力の獲得にどう影響するかといった効果検証は行っていない。

¹¹ ロービジョン、ディスレクシアを対象としたUD デジタル教科書体の「読みやすさ」に関する「エビデンス（科学的根拠）」については、モリサワのHPで紹介されている。
<https://www.morisawa.co.jp/products/fonts/ud-public/study/>

一方、本試行を実施した初級クラスには、コロナ禍等の事情で来日できず、通信状況や時差の影響でライブ型のオンライン授業に困難を感じるであろう学習者が見込まれた。そこで、文型学習動画が授業の内容を補完する教材となり得るのではないかと考え、担当教員とも相談の上、動画を利用してもらうことになった。ただし、実際の授業で動画をどのように活用するかは、担当教員の裁量とした。以下に本試行の概要について述べる。

4.2 対象者

動画教材の試行は、2022年度春学期（4月～7月）に、本学の全学日本語プログラムの初級レベルの2科目（総合・集中）の受講生計14名を対象に実施した。各科目の概要は、表3の通りである。いずれもオンライン（同期型）による13週の授業であるが、週あたりの時間数は総合が90分×5コマで初級前半（書籍版 Vol. 1）の内容を扱うのに対し、集中は90分×10コマで初級前半・後半（書籍版 Vol. 1・Vol. 2）の内容を扱う。受講生数は総合が10名で、主に本学の海外協定校からの交換留学生で構成されていたのに対し、集中は4名全てが本学の学部在籍する正規生であった。また、オンライン授業で導入される週あたりの文型数は総合が4～8項目、集中が11～14項目であり、授業に合わせて事前に視聴する週あたりの動画数は総合が3～6本、集中が6～10本であった。

表3 本試行の対象クラスの概要

クラス	初級総合	初級集中
時間数/週	90分×5コマ	90分×10コマ
受講生数	10名	4名
学生の身分	主に交換留学生	学部正規生
導入文型数/週	4～8項目	11～14項目
視聴動画数/週	3～6本	6～10本

4.3 事前学習課題としての動画視聴

総合・集中クラスのいずれも、授業では、Moodleではなく、Google ClassroomをLMS（Learning Management System）として使用していた。本試行では、文型動画を授業の前日にGoogle Classroomの課題として配信し、動画視聴を受講前の事前学習課題とした。受講生には、授業の開始30分前を期限として、動画視聴後にGoogleフォームで自己申告させ、「課題提出点」の一部として評価の対象とした¹²。

文型動画配信と課題提出期限のタイミングは学習効果を考慮し、クラスチーフの教師（西島）が設定した。文型動画を前日に配信し、授業開始30分までを課題提出期限とすることにより、受講生が前日までに授業で学んだ文型項目を踏まえたうえで文型動画を視聴できる。また、動画視聴で予習として学んだ文型を記憶が新しいうちに同期型のオンライン授業によって再度学習できるため、学習効果の高まりも期待できる。このような意図のもとで動画配信と課題提出のタイミ

¹² 本実践では、あくまでも受講生の自己申告をもとに評定し、どのように動画を「視聴」したかという実態についてまでは確認しなかった。アンケートの自由記述から視聴の実態がうかがえる。

ングを決定したため、結果として、集中クラスではほぼ毎日のように、1～2本の動画視聴課題が課される状況であった。

授業では、受講生が文型動画を視聴したうえで授業に臨んでいると想定し、授業を行ったが、いわゆる「反転授業」のような位置づけではなかった。また、総合クラス、集中クラスともにティームティーチングで複数の教員が授業を担当していたため、文型動画の視聴を踏まえた授業のやり方は各教員によって異なっていた。しかし、一部の教員の実践では、文型動画視聴の利点を生かした授業の効率化を行うことができた。例えば、「て形」の導入を例にとると、文型動画視聴によって従来の授業よりもスムーズな導入が可能になり、それに続く練習やタスク活動により多くの時間を配分することができ、受講生の授業での活動時間の増加につながった。

5. 動画視聴に対する学習者の使用感

5.1 アンケート調査の概要

動画視聴に対する学習者の使用感を把握するため、受講生14名を対象に、動画視聴に関するアンケート調査を実施した¹³。質問項目は、1) 事前学習課題（動画視聴）の達成度（あなたはどの程度課題を達成しましたか：How much have you completed online-video assignments?）、2) 動画視聴の有用性（オンラインビデオの視聴課題は日本語学習に役立ったと感じますか：Do you think online-video assignments helped you learn Japanese?）、3) 事前学習課題としての動画視聴の負担感（オンラインビデオの視聴課題について負担に感じましたか：Did you feel overloaded with online-video assignments?）、4) スライドの文字フォント・色使いの見やすさ（ビデオスライドのテキストのフォント（UD デジタルフォント）についてどう思いますか：What do you think of the font (UD digital font) of the text on the video slides?、ビデオスライドで用いられたフォントの色（黒、青、ピンク）についてどう思いますか：What do you think of the font colors (black, blue, and pink) used in the video slides?）の4つであった。項目4)では、使用フォントやデザインが思い出せるよう、スライド例の画像を挿入した。

項目1)では達成度について該当する数値（80%以上、60-80%、40-60%、20-40%、20%以下）を選んでもらい、項目2)～4)では、1（否定的）から5（肯定的）の5段階評価で回答してもらった。また、全ての項目について、理由や意見を自由記述（英語）で回答してもらった¹⁴。表4はアンケート調査の集計結果である。項目2)～4)の数値は5段階評価の平均値である。このうち、項目3)の「負担感」については、負担感大～負担感小を1（否定的）～5点（肯定的）に置き換えて平均値を出しているため、数値が小さいほど負担感が大きくなっている。以下、課題達成度（5.2）、日本語学習における動画視聴の有用性（5.3）、動画視聴課題の負担感（5.4）、動画のスライドデザイン（5.4、5.5）の順に結果を見ていく。

¹³ アンケート調査への協力と調査結果の論文等での発表については、受講生の同意を得ている。

¹⁴ 原文は英語であるが、本稿では日本語に翻訳したうえで記載している。

表 4 動画視聴に関するアンケート調査結果 *平均値

質問項目	総合 n=10	集中 n=4
1) 課題達成度	80-100% (7) 60-80% (1) 40-60% (2)	80-100% (4)
2) 有用性	4.9 *	5.0 *
3) 負担感	2.8 *	3.8 *
4-1) フォント	4.6 *	4.8 *
4-2) 色使い	4.7 *	5.0 *

5.2 課題達成度

課題達成度については、自己申告ではあるものの、総合では10名中7名、集中では4名全員が80-100%と高く(表4)、受講生の大半がほとんどの文型学習動画を視聴していたことがわかる。総合クラスには課題達成度が低い学生(40-60%)も2名いたが、うち1名は国外から授業に参加しており、インターネット接続の状況が非常に悪かったため、それが課題達成度の低さに影響を与えた可能性も考えられる。また、来日のための移動にともない、動画視聴が物理的に困難であった学生もいた。

5.3 有用性：動画視聴は日本語学習の役に立ったか

表4を見ると、総合・集中ともに「有用性」の評価が高く、学習者は動画視聴が日本語学習の役に立ったと考えていることがわかる。その理由としては、「文法解説部分の説明が簡潔でわかりやすい」「日本語の説明のあとに英語の説明が聞けるのがとてもよい」など文型の理解に役立つという意見、「途中で止めてノートや練習ができる」「繰り返し見ることができる」といった動画の技術的な特性を活用できたという意見、さらに「本を読むだけでは、新しい語彙のイントネーションがどうなっているのかを知ることが難しいことがあるので、ビデオを見ることはとても役に立った」「ビデオで先生の話聞くことで、音や構造に慣れることができ、そのおかげで授業もそれほど難しくなかった。以前、語学を勉強していたときは本だけだったので、授業になると少し戸惑っていた」など、動画の優位点である音声の視聴が役に立ったという意見もあった。また、「予習としてビデオを見てからクラスで再度確認し、クラス内タスクで使用するというプロセスはとても役に立った」「授業の前に自分のペースで予習と練習ができた」「復習のために非常に役に立った」など、授業の予習や復習にも役に立ったという意見もあり、同期型授業との接続という観点からも肯定的な意見が得られた。

5.4 負担感：動画視聴課題は負担だったか

「負担感」を見てみると、総合では5段階評価の中間値(3.0)よりもやや低く(2.8=負担感やや大)、集中ではやや高かった(3.8=負担感やや小)。自由記述からは、「時々長い動画があった」「同時に他のクラスの宿題があるときに動画を視聴するのは少し大変だった」「自分の大学ではこれほど多くの宿題がなかったので、毎日動画を見るということには慣れなかった」など、動画の長さや頻度、他の課題との兼ね合いで負担に感じる意見があった一方、「大変

な時もあったが、とても役に立った」「確かに長かったが、動画には必要な情報がすべて含まれており、とても役に立った」「ときどき動画が長いものが複数ある場合に他の宿題と視聴で一日かかってしまうこともあったが、とても役に立った」など、負担を感じつつも、肯定的に捉えている意見も多かった。一方で、「全くそうは思わない。クラスの準備のためにとても役に立った」「再生スピードは速めて見ることができるので、負担ではなかった」「日本への移動のために大変な時もあったが、それ以外は問題なかった」のような負担を感じなかったという意見も見られた。

5.5 動画スライドのデザイン：文字や色は見やすかったか

動画スライドの文字フォント、色使いについては両クラスともに「見やすい」という肯定的な評価が多かった。また、質問項目としては直接取り上げていなかったが、動画スライドの全体的なデザインについても同様の意見が多かった。自由記述では、「色分けされていることで重要な点がすぐにわかった」「重要な点に焦点を当てられるのがよかった」「色がついていることで文構造をより深く理解するのに役に立った」など、スライドの配色が文法の理解に役立ったという意見が見られた。また、「フォントが素晴らしく動画の視聴を続けなくなった」「デザインのおかげで教科書から学ぶより学びやすかった」「かわいく、好ましいデザインで、気持ちよく学習することができた」など、教材のデザインが学習動機や学びにも良い影響を与えていたことがわかった。

6. まとめと今後の課題

以上の分析から、学習者は事前学習課題としての文型動画視聴は日本語学習に役立ったとして、その有用性を高く評価していることがわかった。同様に、動画スライドの文字や配色といったデザインが理解促進や学習意欲の向上につながっていることがうかがえた。文型学習動画は教室活動における文型導入の役割を果たしており、オンライン版「ともだち」の学習コンテンツの要とも言えるものである。今回は同期型授業を補完する形での試行ではあったが、文型学習動画に対する肯定的な評価は、オンデマンド型のコース開発を進める上で一定の成果を期待させるものであると言える。

一方で、同期型の授業においては、事前学習課題としての文型学習動画視聴は学習者にとってやや負担であったということがわかった。動画の長さということも1つの要因として挙げられてはいるが、ほぼ毎日動画視聴課題が課されていたことや他の課題と重なっていたことが負担の要因としては大きいのではないかと推測される。これは、授業前日にその都度動画を配信し、教師が動画視聴のタイミングを設定していたこととも関係していると思われる。学習者自身が授業の進度に合わせ、計画的に動画を視聴できるような学習環境を整えることで、学習者の負担感を軽減することができるのではないかと考える。こうした考えに基づき、2022年度秋学期（10月～1月）の授業では、Moodle環境で動画がいつでも視聴できるようにし、受講生は授業の進度に合わせて計画的に動画を視聴し、教師はMoodleのログで動画視聴状況を確認するといった、自律的な学習を促す実践にシフトしている。今後、文型学習動画視聴の実態とともに、その有用性と負担感についても改めて検証したい。

さらに、本試行で得られた知見をもとにオンデマンド型教材の開発・検証を続けていくとともに、文型学習動画を反転授業の形で組み込んだブレンディッドラーニング型コースや、自学自習を基本としたフルオンデマンド型コースの開発を進め、その効果検証を行っていきたい。

（執筆分担：1・2・3・4.1・6 工藤、4.2・4.3・5.1・5.2 西島、5.3・5.4・5.5 伊東）

付記

本稿は、第 59 回日本語教育方法研究会（2022 年 9 月 10 日）における同題目の研究発表の内容を大幅に加筆・修正したものである。

参考文献

- 高橋佑磨・片山なつ（2014）『伝わるデザインの基本 —よい資料を作るためのレイアウトのルール— 増補改訂 3 版』技術評論社
- 高橋佑磨・片山なつ（2018）「伝わるデザイン —研究発表のユニバーサルデザイン—」
〈<https://tsutawarudesign.com/index.html>〉（2022.10.24 最終閲覧）
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター編著（2017）『大学の日本語 初級 ともだち Vol.1・Vol.2』東京外国語大学出版会
- 保坂敏子（2022）「オンライン遠隔授業の背景とデザインの視点 —同価値理論・プレゼンス理論の提案—」
『小出記念日本語教育研究会論文集』, pp.123-142.
- 山田智久・伊藤秀明編（2021）『オンライン授業を考える』くろしお出版

（くどう かなこ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授）

（いとう かつひろ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 講師）

（にしじま えりこ 東京外国語大学世界言語社会教育センター 特任助教）

Learners' Responses to Watching Grammar Videos as a Prior Learning Assignment:

Toward the Development of Online Japanese Learning Materials for Beginners

KUDO Kanako, ITO Katsuhiko, NISHIJIMA Eriko

KEYWORDS: Online Japanese learning materials for beginners, On-demand learning materials, Grammar learning videos, Prior learning, “*Tomodachi*”

“*Tomodachi*” is a digital content version of the textbook “*Elementary Japanese for Academic Purposes (Tomodachi)*” developed by Japanese Language Center for International Students, Tokyo University of Foreign Studies in 2017. This paper reports on a trial of the grammar learning videos, one of the contents of “*Tomodachi*”. The online version of “*Tomodachi*” includes the following contents: 1) Conversation practices, 2) Grammar learning videos, 3) Grammar notes, 4) Grammar practices, 5) Kanji learning videos, 6) Tasks, and 7) Lesson quizzes. The trial was conducted to validate the Grammar learning videos. In this trial, grammar video viewing was implemented as a prior learning assignment in two different beginner-level Japanese language classes: Integrated Japanese and Intensive Japanese.

A questionnaire survey was administered to a total of 14 students, consisting of four items: 1) achievement of the assignment, 2) usefulness of the video viewing, 3) burden of viewing the video as a prior learning assignment, and 4) design of the video slides. The results of the analysis showed that 1) the majority of the students watched most of the videos, 2) the students highly evaluated the usefulness of watching the grammar videos as a prior learning assignment, 3) video viewing was a little burdensome for the learners, and 4) the design of the video slides, including text font and color scheme, promoted understanding and increased motivation for learning. These results indicate a positive evaluation of grammar learning videos, which is a key component of “*Tomodachi*” and suggest a promising future for the development of on-demand Japanese learning courses.